



長野県林業総合センター 塩尻市片丘 5739

Nagano-prefectural Forestry Research Center

TEL 0263-52-0600

FAX 0263-51-1311

ごま色斑点病

キーワード：レッドロビン、斑点、早期落葉

県内の生け垣に使われている代表的な樹種には、イチイ、マサキ等の他に、カナメモチの仲間であるレッドロビンがあります。このレッドロビンについて、「葉に斑点がでて、どんどん葉が落葉する。」「葉が落ちて、生け垣が枯れそうだ。」といった相談や、被害枝の持ち込みが多くあります。これらの原因の多くが、ごま色斑点病による被害です。

ごま色斑点病

バラ科ナシ亜科のザイフリボク、カリン、マルメロ、ビワなどの多くの樹種で被害が確認されている葉枯性の病害で、中でもカナメモチの仲間であるレッドロビンは、特にこの病気にかかりやすく、症状がひどくなることが知られています。

この病気は、春に伸びて開いた葉にたくさんの赤紅色の斑点ができて、その斑点は徐々につながり灰～灰褐色の斑点になります(写真)。また古い葉には、発病しないのも特徴のひとつです。

病葉の斑点の中央には、黒色の分生子層といわれる菌体を形成され、ここから翌年の春に分生子が飛散して、新たな被害につながっていきます。

また病気にかかった葉は、この時期に一気に落葉し、葉量が急減して、病気にかかった木はだんだん樹勢が衰えていきます。



ごま色斑点病にかかったレッドロビン

どうすればいいのか

病害防除の第一は、病気が発生してからの手当てではなく、病害の発生を未然に回避、予防することです。そのため、葉枯性病害では、感染源となる病落葉を集めて焼却したり、除去して清潔な環境にすることが大切です。

また、薬剤による防除では、健全な部位への感染防止が目的で、被害部の治療効果は期待できません。そのため、薬剤による防除は、病原体が感染する可能性のある時期（5月初旬から8月）に月2回程度散布を行うことが必要です。

防除薬剤として、ベノミル水和剤、チオファネートメチル水和剤、有機銅水和剤などの殺菌剤があります。

例えば、ベノミル水和剤の場合は、適量の展着剤を加えて水を加えて2,000倍に希釈して、散布します。薬剤によっては、使用回数に制限がありますので、薬剤の取扱説明書をよく読んで使用して下さい。

展着剤とは

展着剤は、散布した薬液が植物の葉に付着しないで、薬液が玉のようになって落ちるのを防ぐために使用する薬剤です。薬液が付着しにくい植物としては、キャベツやネギ、イネなどが知られており、ごま色斑点病の被害を受けやすいレッドロビンもその一つといえます。

また、展着剤は、水和剤（水に溶けない有効成分を微粒子化した農薬）を水に均一に混ぜたりやすくするためにも用いられます。

しかし、適切に使うと有効な展着剤も、その有効成分が界面活性剤であるため、あまり多く使いすぎると、今度は簡単に流れ落ちてしまい、うまく薬液が付着してくれません。

そのため、展着剤を使用する時は、**取扱説明書**に記載された添加量を守ることが重要です。

薬剤の剤型別の展着剤の一般的な使用方法としては、乳剤、液剤、またはフロアブル剤の場合は、展着剤は少なめか不用、水和剤の場合は、水と均一に混ぜりにくいので展着剤を使用するほうがよいと考えられます。

担当者 育林部 岡田充弘